

病害虫発生予察情報予報第 6 号（9 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9 月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (山間早植え)	トビイロウンカ	やや多	 コブノメイガ  イネカメムシ
	紋枯病	並	
	斑点米カメムシ類	やや多	
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	やや多	
	穂いもち	並	
	紋枯病	やや多	
	斑点米カメムシ類	やや多	
	コブノメイガ	多	
	白葉枯病	並	
<p>1. トビイロウンカ 本種の発生状況は、田植え時期、水稲の品種、地域、これまでの防除の違い等によって異なるので、発生予測図（共通-図 1）を参考にして、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。</p> <p>2. コブノメイガ 中晩生品種を中心に発生が多い。止葉を含む上位 3 葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、幼虫ふ化揃い期である発蛾最盛期の 7 日後に薬剤防除を実施する（共通-図 2）。</p> <p>3. イネカメムシ 普通期水稲（早生品種）での発生を確認している。圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除だけでなく、出穂期の薬剤散布を検討する。</p>			
大豆	ハスモンヨトウ	やや多	ハスモンヨトウ による 白変葉 
	カメムシ類	やや多	
	紫斑病	やや多	
<p>1. ハスモンヨトウ 今後、本種の増殖に好適な気象条件が予想されており、発生が増加する恐れがある。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。</p> <p>2. 葉焼病 近年発生が多い。発病後（感染後）の防除では効果が期待できないため、台風の襲来等による強風雨が予想されるときには、襲来前に薬剤散布を行う。</p>			
普通作全般	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ	うどんこ病	並	 炭疽病 汚斑型病斑
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	やや多	
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	並	
1. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） 苗の立枯れ及び炭疽病による葉の汚斑型病斑が複数の圃場でみられている。また、向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている。本圃での立枯れを防ぐため、発病株の早期除去や降雨前の薬剤散布等、防除対策を徹底する（令和6年7月22日付け病虫害対策資料第13号参照）。			
アスパラガス	茎枯病	並	 褐斑病
	褐斑病	並	
	斑点病	並	
	アザミウマ類	やや少	
	ハダニ類	並	
1. 褐斑病 3週間間隔の薬剤防除を基本とするが、既に発生が見られる場合や、週間天気予報により曇雨天が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする等の対策を徹底する。なお、薬害の発生を防止するため、薬剤の乾きにくい条件での散布を避ける。 2. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬液が内部まで到達しにくいので、株外側からの散布に加え、ノズルを株内に差し込み散布したり、株の両側から散布するなど、十分な薬量で丁寧に散布する。			
タマネギ	1. ベと病、乾腐病 苗への感染を防ぐため、育苗圃のバスアミド微粒剤による土壤消毒を確実にを行う。また、乾腐病菌は、育苗トレイに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、トレイは必ず新品もしくは消毒したもの（付着した土を水洗して除去した後、60℃の温湯に10秒間浸漬、あるいはケミクロンG 1,000倍液に10分間浸漬）を使用する。		
野菜・花き共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、 オオタバコガ シロイチモジヨトウ)	やや多	 シロイチモジヨトウ
	1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモヨトウ） フェロモントラップでの誘殺数はおおむね平年並で推移しているが、気象予報では今後これら害虫の増殖に好適な条件が予想されており、発生が増加する恐れがある。各圃場での発生状況を確認し、若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 地域によっては離脱が始まっている可能性があり、一部の果樹園では飛来が確認されているため、今後の発生動向に注意する。果樹園への飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察する。飛来が確認されたら、直ちに合成ピレスロイド系薬剤またはネオニコチノイド系薬剤で防除する。両系統の薬剤の残効期間は10～15日程度である（令和6年8月27日付け病虫害発生予察注意報第3号参照）。</p> <p>2. 夜蛾類 高い夜温が続く年には、夜蛾類の活動が活発になり被害が多くなる。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等の植物は、夜蛾類の幼虫の食草であるため除去する。忌避灯設置園では、点灯時間を日没、日の出の時刻に合わせてるとともに、確実に点灯していることを確認する。</p>		
カンキツ	かいよう病	多	 かいよう病
	黒点病	多	
	ミカンハダニ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	<p>1. かいよう病 無機銅水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は20～25日である。無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると、無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず無機銅水和剤を散布する。 発病した枝や葉は伝染源となるため除去・処分する。ただし、強剪定は行わない。</p> <p>2. 果実腐敗対策 収穫時に果実に傷を付けないよう丁寧に扱うとともに、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。薬剤は、収穫7～10日前に薬液が霧状になるノズルを使いかかりムラがないように果実全面に散布する。なお、薬剤散布後に100mm以上の降雨があった場合は再散布する。</p> <p>3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では、防除を徹底する。</p>		
ナシ	黒星病	やや多	
	ナシヒメシンクイ	やや多	
	ハダニ類	並	
	<p>1. 収穫後の防除（ハダニ類、チュウゴクナシキジラミ） ハダニ類、チュウゴクナシキジラミが多発すると早期落葉の原因となるため、収穫後も圃場を観察し、これらの発生が確認される場合は防除を行う。なお、園周縁部などスピードスプレイヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。</p>		
ブドウ	べと病	多	 べと病
	褐斑病	並	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)} 平年比	予報対象の病虫害 (抜粋)
	1. 収穫後の防除（べと病、黒とう病） これら病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。		
茶	炭疽病	多	 輪斑病 炭疽病
	輪斑病	多	
	カンザワハダニ	やや多	
	クワシロカイガラムシ	並	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	
	チャノコカクモンハマキ	やや多	
	チャノホソガ	並	
	1. 炭疽病 秋芽生育中の園では、降雨が多いと多発しやすい。秋期の発生は、翌春一番茶の収量・品質に影響が大きいいため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。特に多発園については予防剤（萌芽期）＋治療剤（三葉期）の防除を行う。		
	2. 輪斑病 本病は、高温期に発生が多く、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。		
	3. カンザワハダニ 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに防除を行う。散布の際は、本虫の生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。なお、薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤は年一回の使用とする。		
	4. チャノコカクモンハマキ 9月中～下旬頃が重点防除時期である。幼虫はつづった葉の内側に生息するため薬剤防除の効果が低下するので、必ず適期（発蛾最盛期から7～10日後）に防除を行う。		
	5. チャトゲコナジラミ 多発園では、葉裏に薬剤が付着しやすいように、裾刈り等を行った後に防除を行う。成虫期は防除効果が低いため、発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。		

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する9月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和6年8月22日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年より多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における9月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	10	10 (24.5℃)	80	高い
降水量	20	30 (169.3 mm)	50	多い

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

定期調査：12 圃場
調査日：8月22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（山間早植え水稻）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率0%（平年7.3%、前年0.7%）

平年比：並（±）

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年よりやや多い（±～+）

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

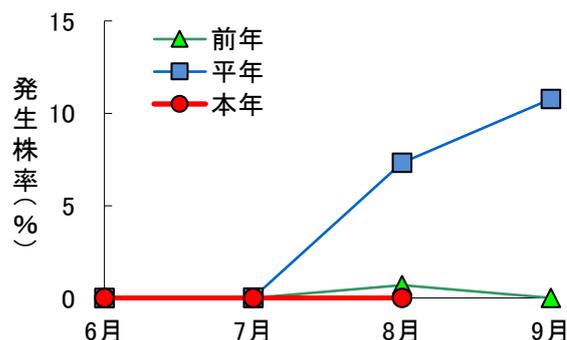


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生株率 0.3%（平年 1.4%、前年 1.7%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

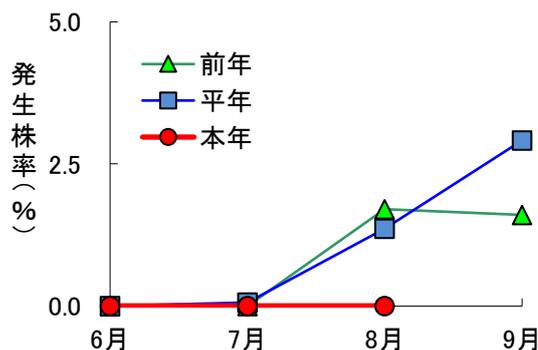


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカス

ミカメ、ミナミアオカメムシ、イネカメムシ等)

水稻（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：8月19～22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生状況

①定期調査(図1参照)

発生株率 0.1% (平年3.4%、前年0%)

平年比：やや少く(一～±)

(2) トビイロウンカの飛来状況

本年は複数回の飛来を確認しており、嬉野市のライトトラップでの6月1日から8月15日までの総捕獲数は、平年よりやや多い(±～+)

(3) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

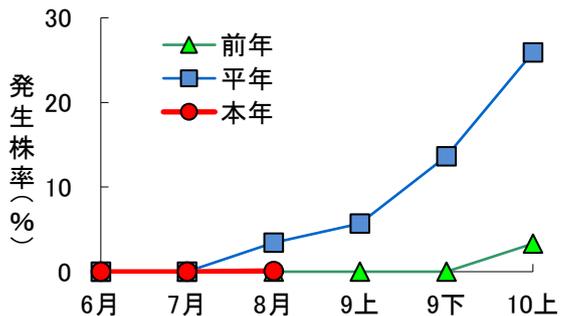


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

①定期調査(図1参照)【葉いもち】

発生株率 5.3% (平年 14.1%、前年 4.5%)

平年比：やや少く(一～±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

葉いもちの発生が確認される圃場では、穂ばらみ期～出穂期の薬剤防除を徹底する。穂いもちの発生が多くなると予想される場合には、穂ぞろい期にも防除を行う。

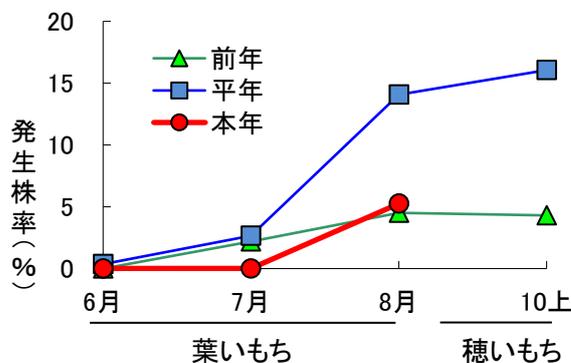


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率 1.7% (平年 2.8%、前年 1.0%)

平年比：並(±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

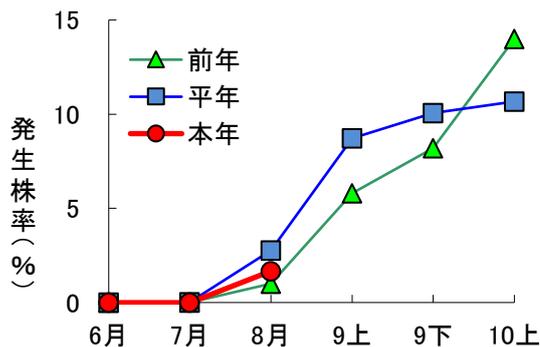


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数 (表1)

平年比：並~多く、調査地点によるばらつきが大きい(±~+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、発生状況を確認する。穂揃い期の20回すくい取りでクモヘリカメムシが5頭以上認められた場合は直ちに防除を実施する。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(2024年8月19日~22日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホノハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカシツカスミカメ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市川副町	河川敷	エノコログサ類	0	0	4	0	1	0	6	0	0
唐津市半田	畦畔	ヒエ類	0	0	0	0	1	4	5	1	0
鳥栖市三島町	畦畔	オヒシバ	0	0	1	0	0	0	36	1	0
伊万里市松浦町	空地	オヒシバ	0	0	1	2	0	0	1	5	0
伊万里市東山代町	畦畔	ヒエ類	0	0	7	0	5	11	0	0	0
武雄市橘町	河川敷	エノコログサ類	0	0	4	4	0	0	0	0	0
鹿島市常広	河川敷	ヒエ類	1	1	0	0	0	0	10	3	0
小城市三日月町	畦畔	ヒエ類	57	30	11	2	2	0	5	2	0
吉野ヶ里町	空地	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	14	1	0
みやき町	畦畔	オヒシバ	0	0	0	0	0	0	15	5	0
白石町牛屋	河川敷	エノコログサ類	1	11	1	2	0	1	1	0	0
白石町福富1	河川敷	ヒエ類	0	0	8	1	0	0	0	0	0
白石町福富2	空地	ヒエ類	9	2	2	0	4	0	354	28	0
本年(平均)			6.8	4.4	3.4	1.1	1.1	1.2	40.0	4.4	0
平年(過去10年の平均)			2.5	6.0	1.9	0.9	0.7	1.0	7.4	3.3	0.03
前年(平均)			1.7	9.5	1.9	1.5	0.1	0.6	4.5	3.8	0

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

食害株率 43.8%（平年 9.0%、前年 18.8%）

平年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

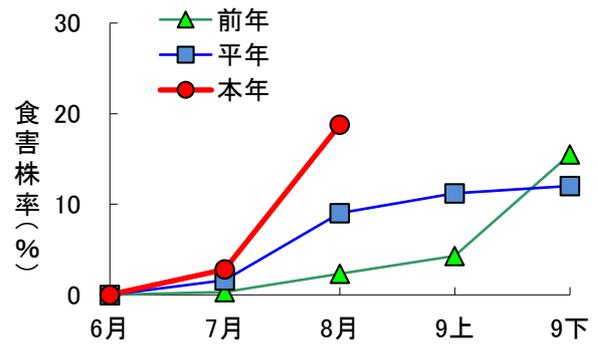
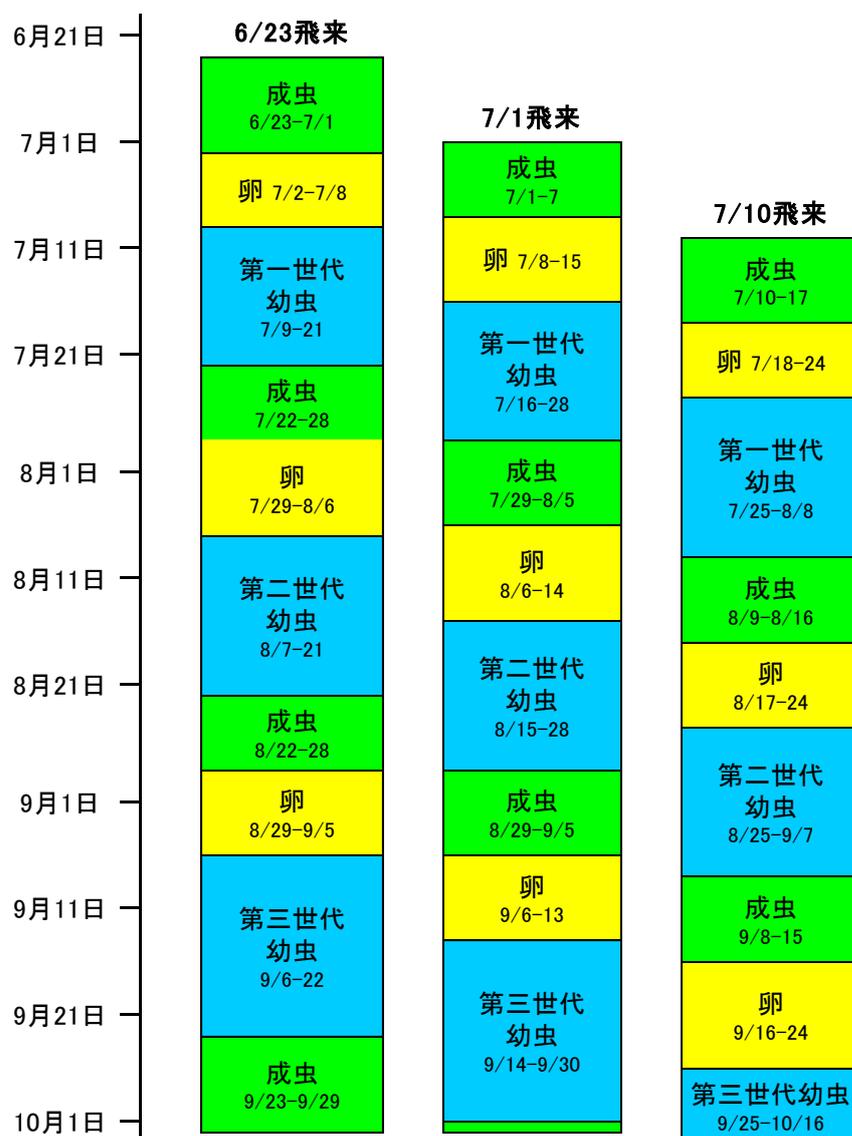
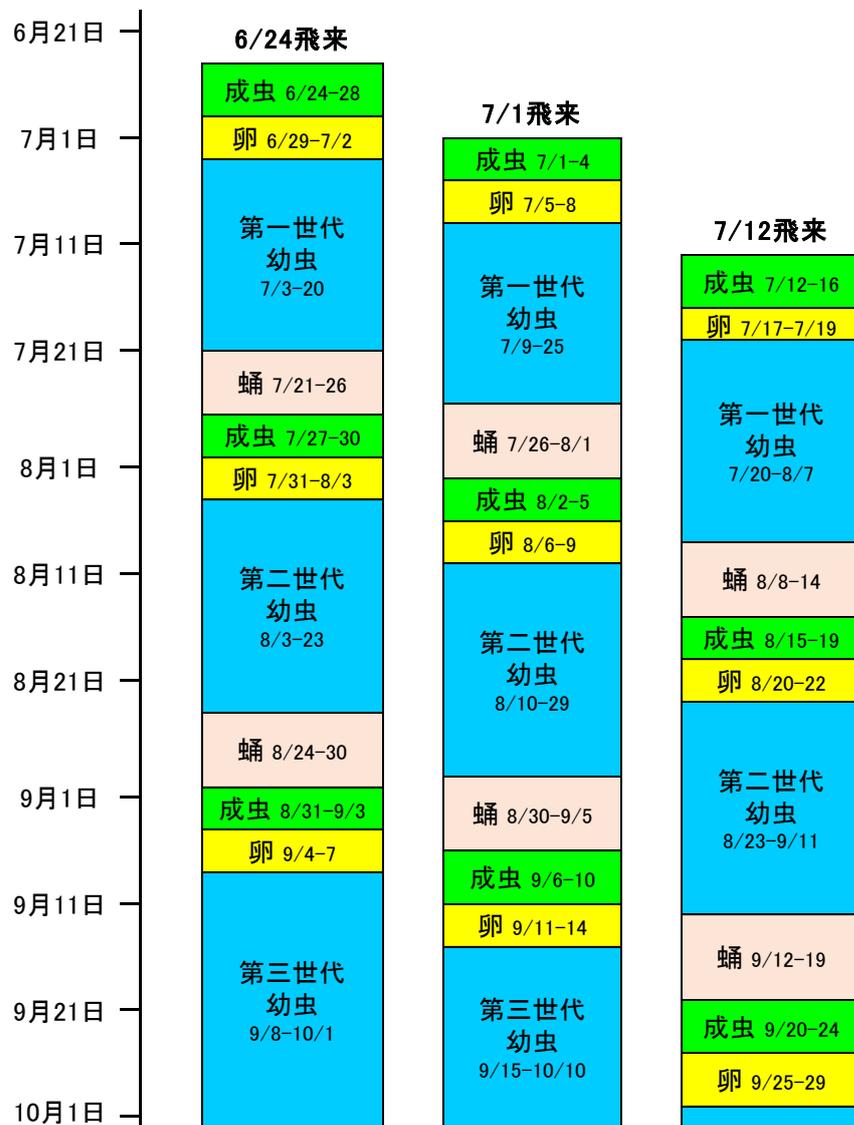


図1 普通期水稲でのコブノメイガの発生推移



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第3版、2024年8月23日作成）

1. 6月23～24日頃（図では6月23日）、7月1～2日（図では7月1日）、7月10～11日（図では7月10日）の飛来虫を起点とし、トビイロウンカの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ（8月23日以降は平年値）に基づき作成した。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。



共通-図2 コブノメイガ各世代の発生予測 (第3版、2024年8月23日作成)

1. 6月24~27日頃(図では6月24日)、7月1~3日頃(図では7月1日)、7月12~15日頃(図では7月12日)の飛来虫を起点とし、コブノメイガの有効積算温度及び佐賀市川副町のアメダスデータ(8月23日以降は平年値)に基づき作成した。
2. 田植え時期、品種等の違いによって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 今後の気象経過等に応じて、**本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認**する。

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：8月19～22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子（大豆）

1. ハスモンヨトウ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生株率 0.5%（平年 1.4%、前年 1.4%）

平年比：やや少（-～±）

白変葉発生株率 0.6%（平年 0.7%、前年 0.6%）

平年比：並（±）

②トラップ調査（図2 参照）【県内8地点】

平年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

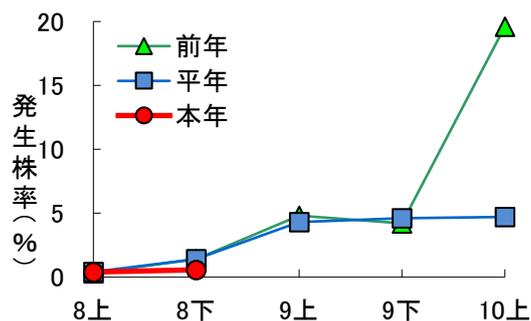


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

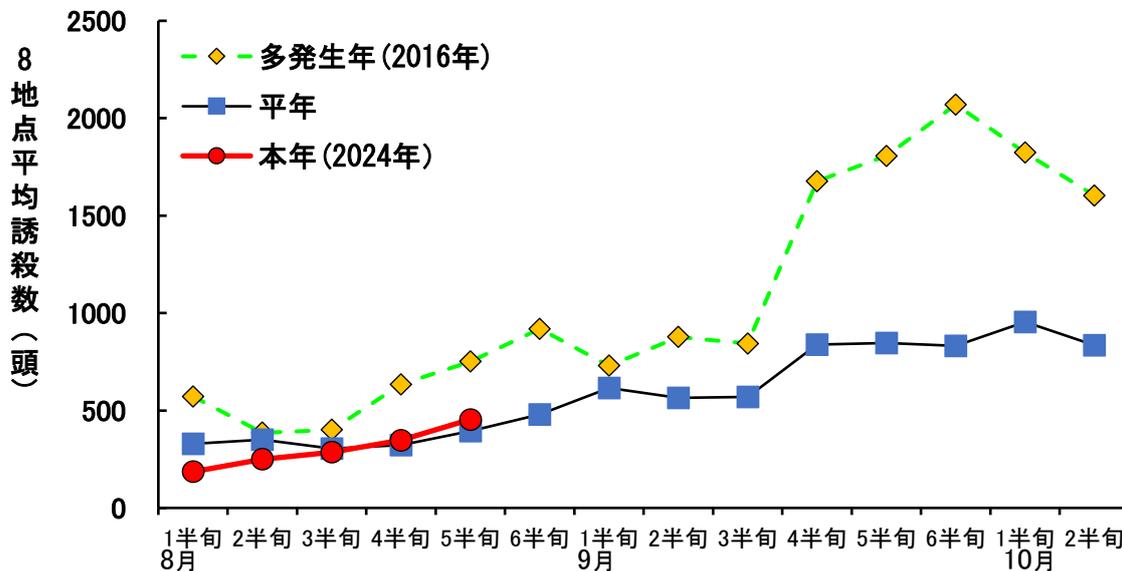


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
（農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数）

2. カメムシ類 (アオカメムシ, イモヅガメムシ, ホリカメムシ, ミナアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率 0% (平年 0.1%、前年 0.2%)

平年比：並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

莢の伸長初期から子実肥大中期に防除する。発生が多い圃場では、7~10日間隔で2~3回防除を行う。

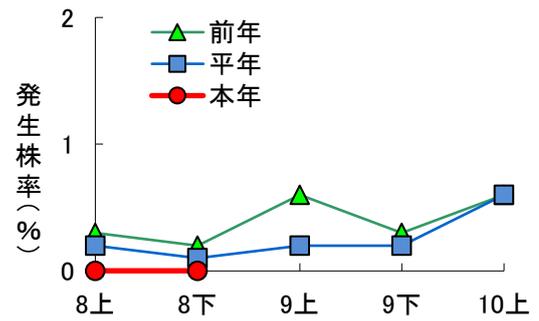


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3. 紫斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

若莢期~子実肥大中期に薬剤防除を実施する。

イチゴ (育苗圃)

定期調査 10 圃場

調査日：8月19~22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 2.2%、前年 0%)

平年比：並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。

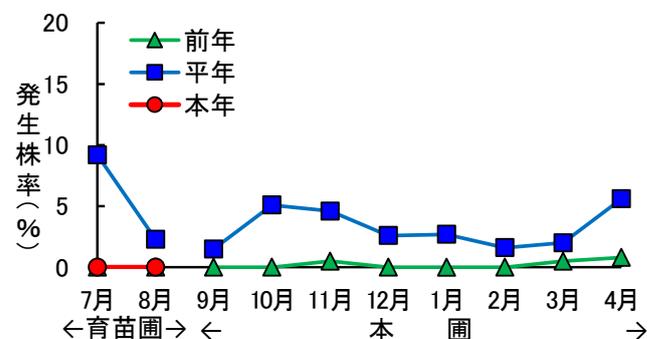


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. 苗立枯症（炭疽病・疫病・萎黄病）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 子苗での発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0.14%（平年0.07%、前年0.66%）

平年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

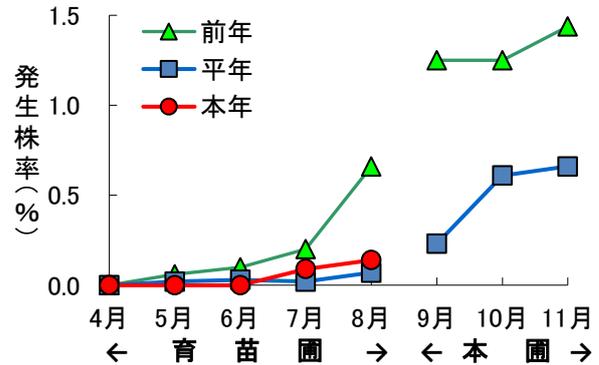


図1 イチゴ立枯症の発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：9.2%（平年9.8%、前年10.0%）

平年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

本圃へ持ち込まないように、定植前までの防除を徹底する。

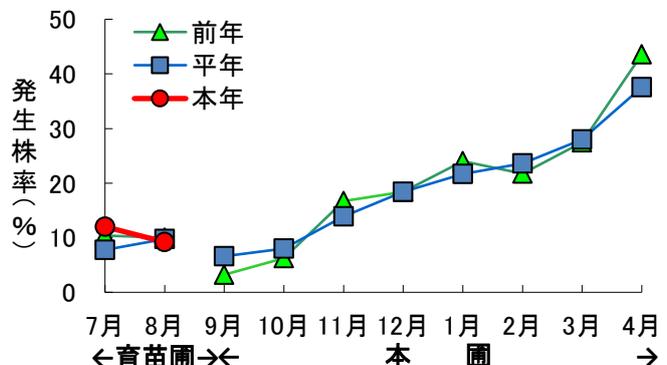


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

定期調査：8圃場

調査日：8月19日～22日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：11.9%（平年22.8%、前年25.6%）

平年比：やや少（-〜±）

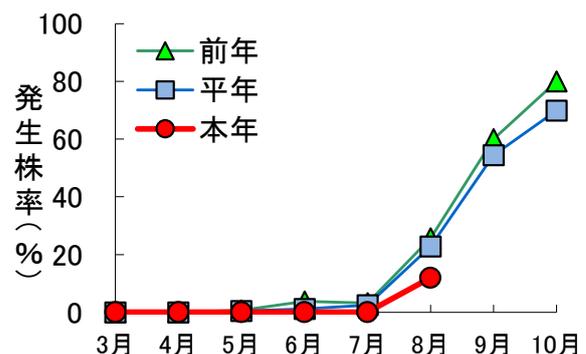


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

(2)9月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。
- (2) その他については特記事項を参照する。

野菜・花き共通

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1,2 参照）

作物名	食害株率(%)	平年比	平年値(%)	前年値(%)
イチゴ	0	やや少〈-~±〉	0.9	0.4
アスパラガス	0	並〈±〉	0.4	0

②フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年並（図3）。〈±〉

③フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並（図4）。〈±〉

④フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺数は、平年並（図5）。〈±〉

(2)9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

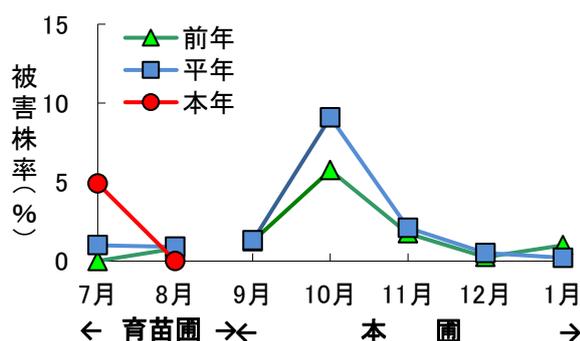


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

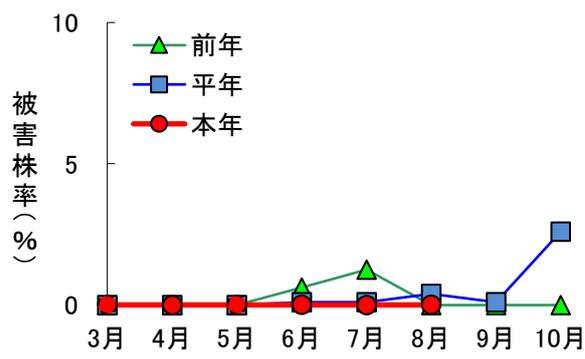


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

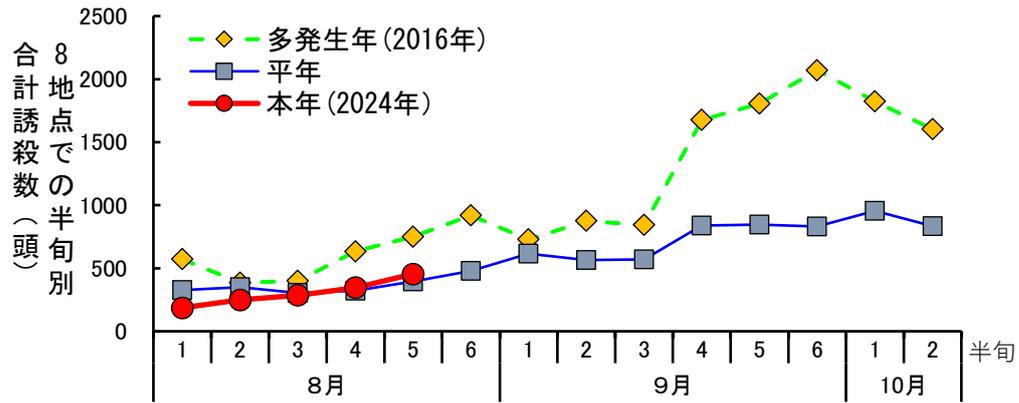


図3 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数)

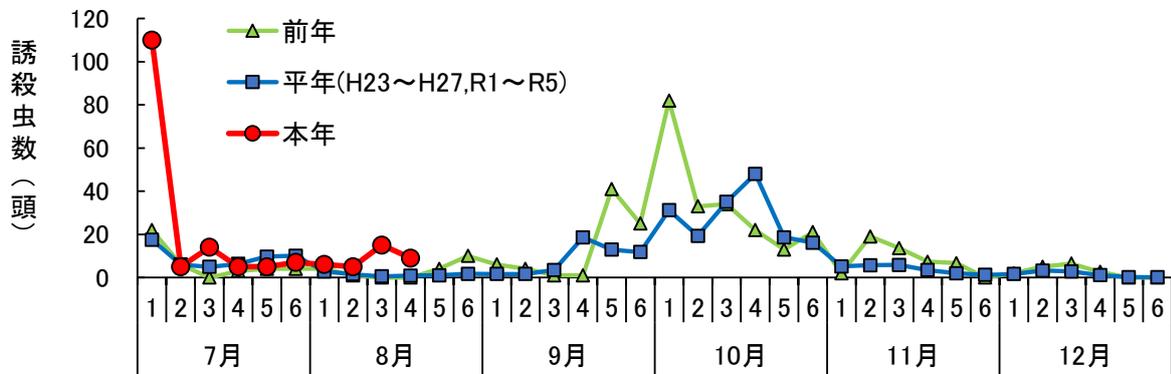


図4 フェロモントラップによるオオタバコガ雄成虫の半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

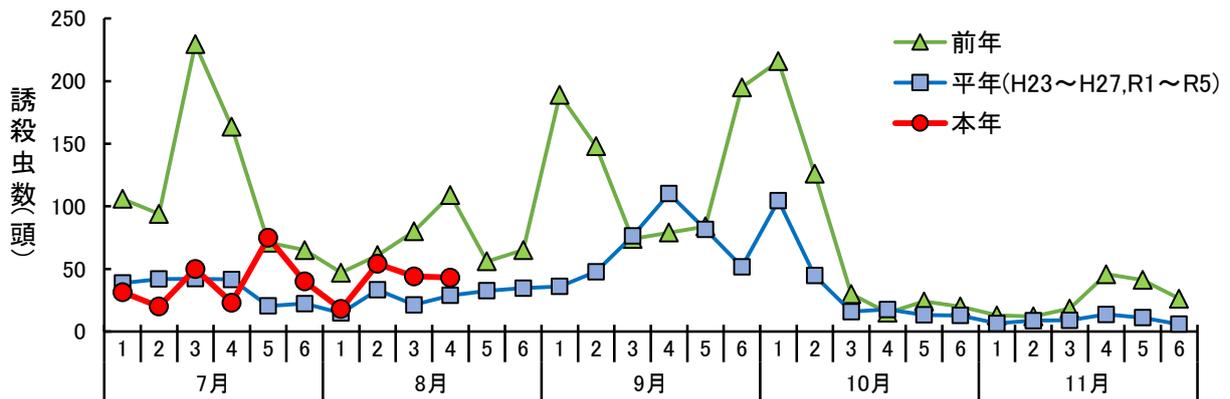


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

1. カメモシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①予察灯 (図1、図2参照) 平年比：多(+)

②フェロモントラップ (図3参照) 平年比：並(±)

(2) ヒノキ毬果における寄生数 (図4、表1参照、8月16~21日調査)

平均成幼虫数：23.3頭 (平年18.8頭、前年42.7頭) 平年比：並(±)

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数 (図5、表1参照、8月16~21日調査)

平均口針鞘数：16.6本/果 (平年14.4本、前年11.2本) 平年比：並(±)

(4) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

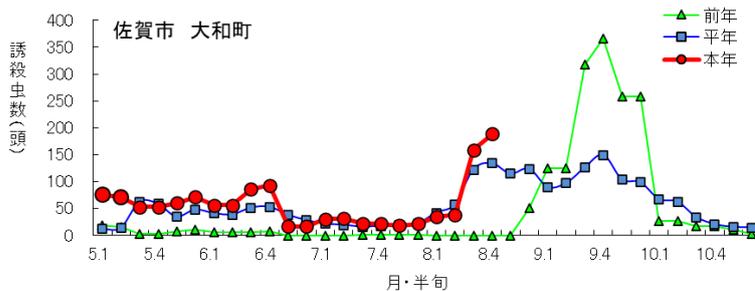


図1 予察灯 (佐賀市) による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

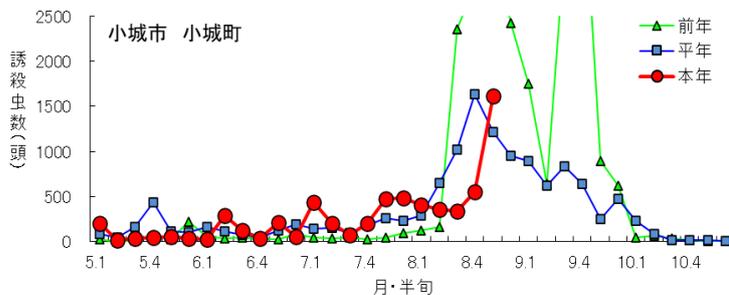


図2 予察灯 (果樹試験場調査) による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

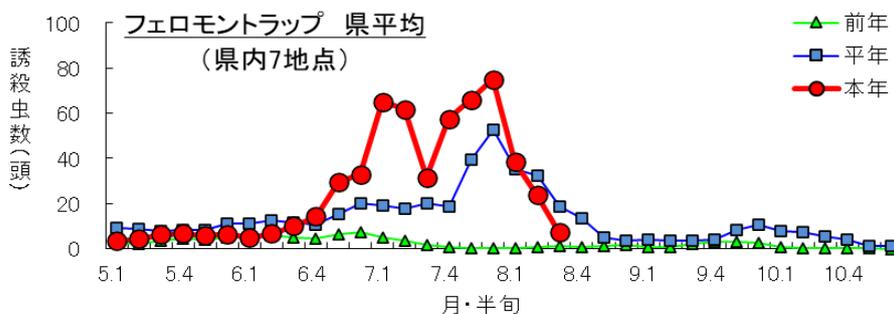


図3 フェロモントラップ (鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)) による果樹カメモシ類の平均誘殺数の推移

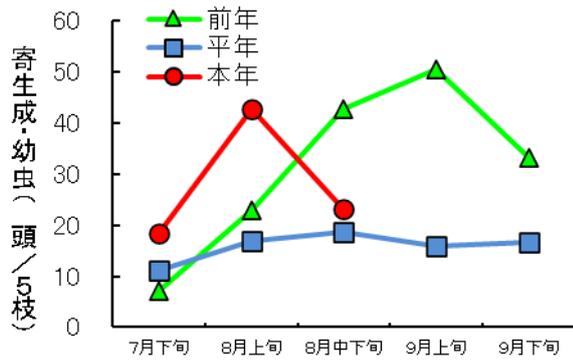


図4 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

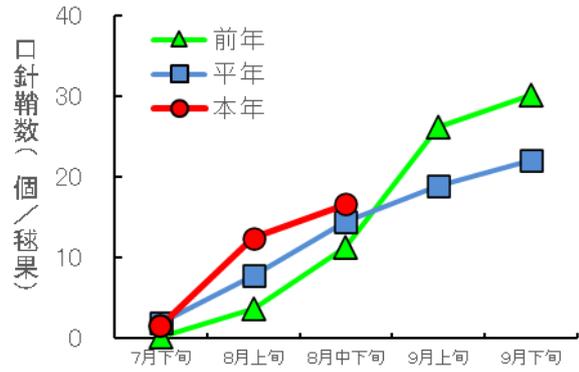


図5 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数 (図4、5に関する地点別の状況)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾									ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾		
		7月下旬			8月上旬			8月下旬				7月下旬	8月上旬	8月中下旬
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計				
1	上峰町	-	-	-	-	-	-	-	-	-	少	-	-	-
2	神崎市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	極少	-	-	-
3	小城市	2	0	2	9	6	15	12	1	13	中	0.2	6.7	14.3
4	唐津市1	20	8	28	63	2	65	1	0	1	少	0.5	10.9	18.8
5	唐津市2	21	2	23	13	2	15	26	2	28	少	0.2	3.4	11.9
6	唐津市3	50	15	65	35	12	47	3	0	3	極少	0.7	7.2	7.8
7	伊万里市1	3	14	17	13	27	40	0	0	0	やや少	1.6	14.4	16.1
8	伊万里市2	6	9	15	9	19	28	6	24	30	少	1.7	19.0	11.3
9	伊万里市3	5	0	5	4	117	121	1	6	7	極少	0.1	9.1	22.5
10	多久市	2	0	2	23	9	32	1	1	2	やや少	0.3	5.1	5.0
11	鹿島市1	19	3	22	9	14	23	2	1	3	中	5.4	25.0	32.1
12	鹿島市2	9	9	18	17	13	30	3	2	5	極少	3.9	22.5	19.6
13	太良町1	9	11	20	72	15	87	74	6	80	やや多	1.0	14.9	19.2
14	太良町2	1	4	5	9	0	9	104	3	107	やや少	1.9	10.9	20.5
	平均	12.3	6.3	18.5	23.0	19.7	42.7	19.4	3.8	23.3	少	1.4	12.4	16.6
	平年	-	-	11.1	-	-	17.0	-	-	18.8	-	1.9	7.8	14.4
	前年(R5年)	-	-	7.1	-	-	23.0	-	-	42.7	やや少	0.2	3.6	11.2

1)たつき落としによる調査

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡農総試の達観調査法に基づいて調査

- ・極少:一部の木では丈夫にも毬果が見られるが、多くの木では上部にも毬果がない。
- ・少:毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果がある
- ・やや少:毬果が全くない木も見られるが、多くの木の上部には毬果があり、一部の木では中央部にもみられる
- ・中:中央部まで毬果が見られる木が多い
- ・やや多:多くの木では中央部までたくさんの毬果が見られ、一部は下部にも毬果がある
- ・多:下部まで毬果が見られる木が多い
- ・極多:ほとんどの木で下部までたくさんの毬果が見られる

3)口針鞘数が1果当たり25本を超えるヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

4)各調査日における口針鞘数から離脱予想時期(25本/果に達する時期)を推定

5)離脱予想時期の県平均は、各調査日および口針鞘数の平均値により算出

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地域等で差が大きいため、各地点の調査結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8圃場
調査日：8月19～21日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0.4%（平年0.0%、前年0.4%）

平年比：多〈+〉

発生果率：0%（平年0.0%、前年0.1%）

平年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

特記事項参照。

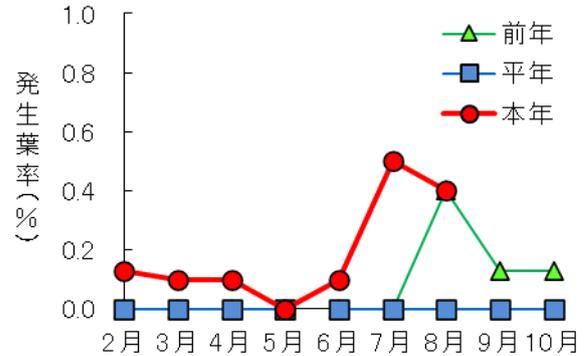


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

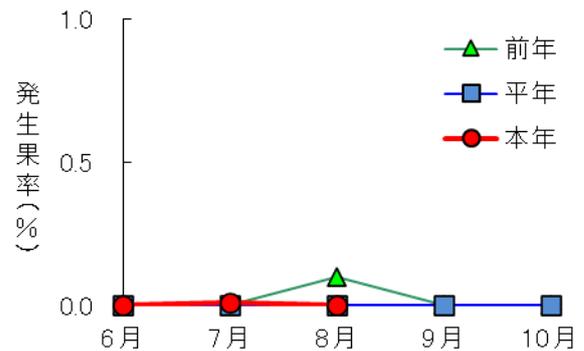


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生果率：28.0%（平年12.8%、前年10.9%）

平年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) マンゼブ水和剤を散布した場合、次回の薬剤散布時期は積算降雨量が200～250mmに達した時点を目安とする。ただし、この雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の薬剤散布を行う。‘せとか’は黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量150mmを次回の薬剤散布の目安とする。

(2) 枯れ枝や剪定枝、切り株等は本病の伝染源となるので、除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、ビニルの袋などで被覆して病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

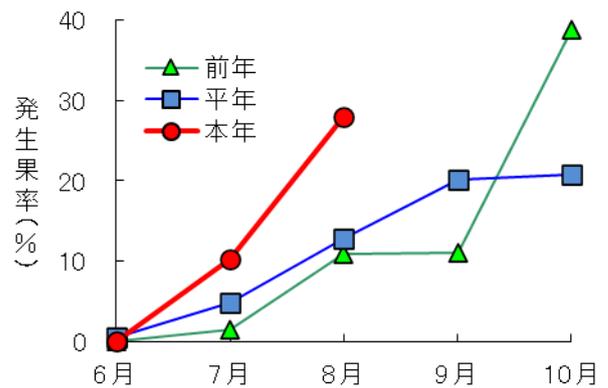


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：8.0%（平年2.6%、前年1.8%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみでの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

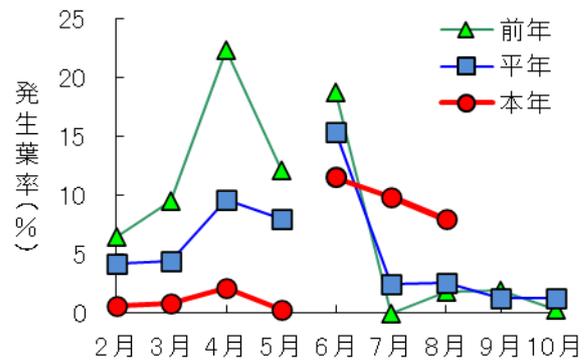


図1 ミカンハダニの発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

定期調査：9圃場
調査日：8月16日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：0%（平年0.8%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

越冬菌の密度低下を図るため、収穫後の防除を徹底する。

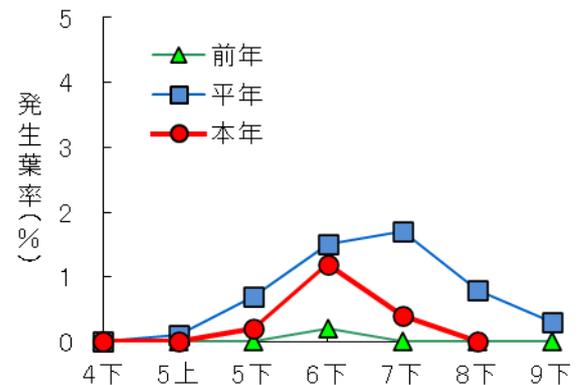


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

2. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①フェロモントラップ（図1 参照） 平年比：並（±）

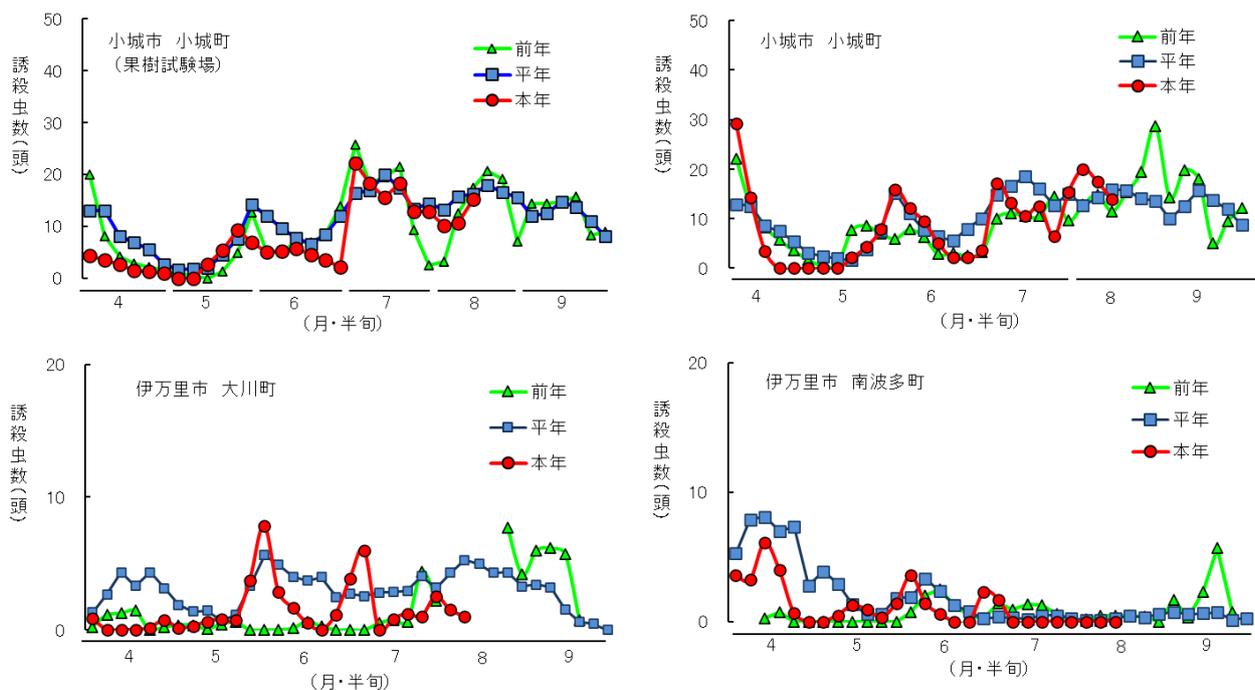


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 使用する薬剤の選定（収穫前日数や汚れ）には十分注意し、収穫まで7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (3) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：11.6%（平年8.1%、前年15.6%）

平年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

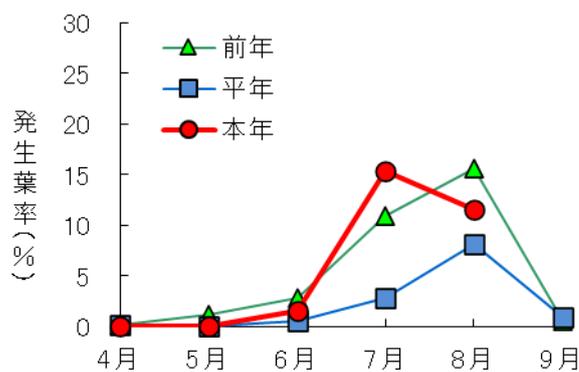


図1 ナシハダニ類の発生推移

ブドウ

定期調査：6圃場
調査日：8月16～21日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：5.3%（平年3.2%、前年6.5%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本病は降雨により伝染するので、降雨前の予防散布を徹底する。

(2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。

(3) その他については、特記事項を参照する。

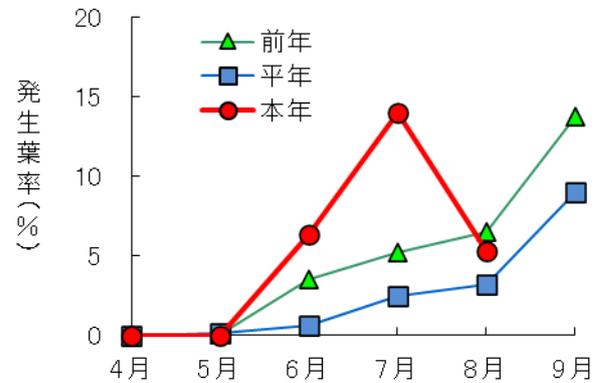


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

定期調査：7圃場
調査日：8月19～21日



[【概要に戻る】](#)

定期調査圃場の様子

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉数：13.7枚/m²（平年4.8枚、前年12.7枚）

平年比：多（+）

(2) 9月の気象予報

降水量は多く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

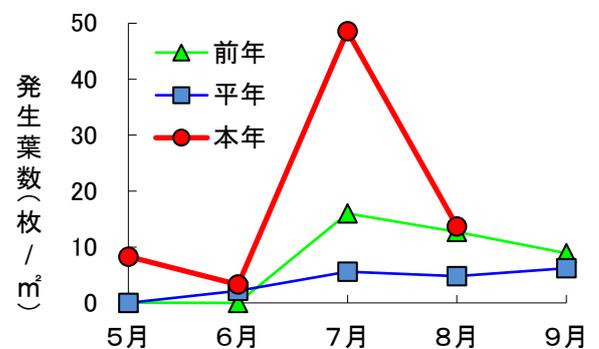


図1 炭疽病の発生葉数の推移

2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉数：6.4 枚/m² (平年 3.1 枚、前年 13.3 枚)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、多発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

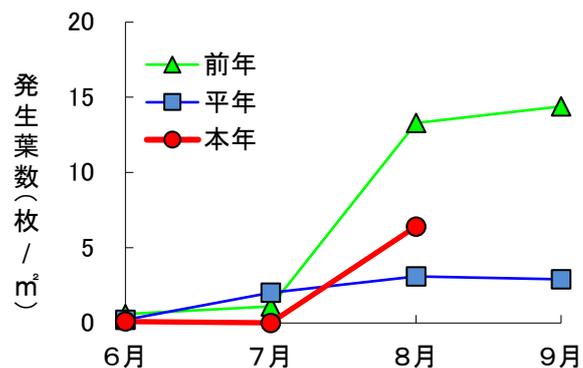


図1 輪斑病の発生葉数の推移

3. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査 (図1 参照)

発生葉率：7.5% (平年 3.2%、前年 2.9%)

平年比：多 (±)

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

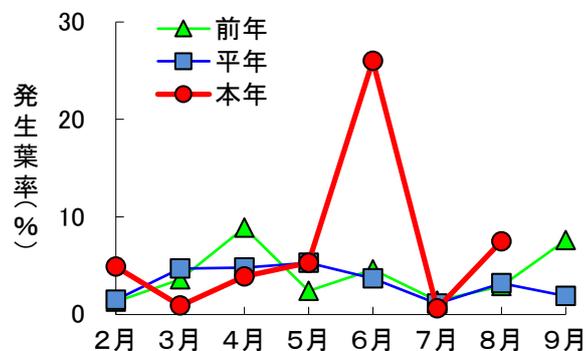


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

4. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査

発生株率 (雄繭)：21.4% (平年 14.4%、前年 25.0%)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 9月の気象予報

降水量は多く、少発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

防除適期は第三世代幼虫ふ化期の9月上中旬頃である。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期3~4日後に薬剤防除を実施する。

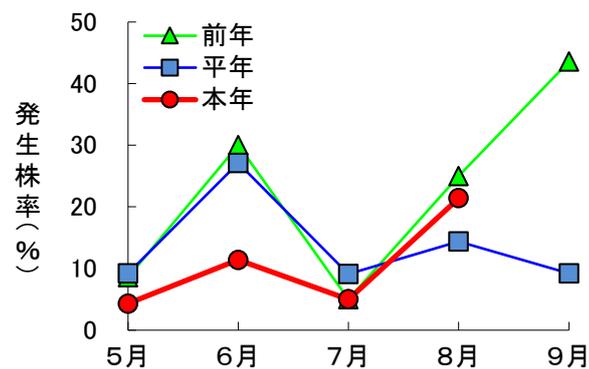


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：68.9頭/4ヶ所 (平年26.8頭、前年6.4頭)

平年比：多<+

② 吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比：やや少<-~±>

(2) 9月の気象予報

気温は高く、降水量は多く、並発生の条件<±>

3) 防除上注意すべき事項

秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

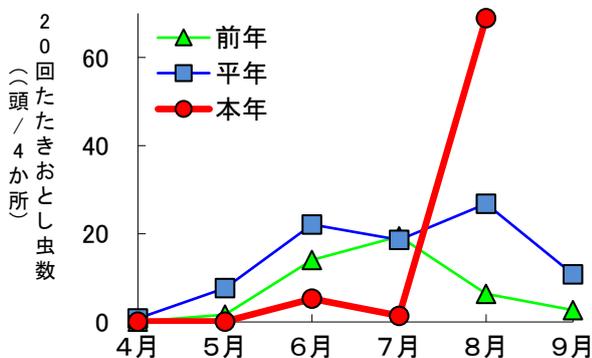


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

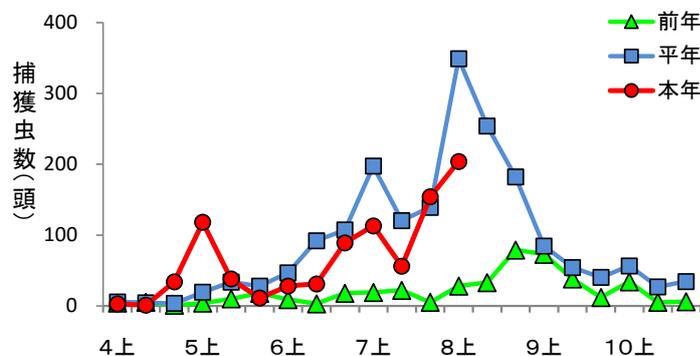


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

6. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：7.1頭/4ヶ所 (平年2.7頭、前年8.0頭)

平年比：多<+

(2) 9月の気象予報

気温は高く、多発生の条件<+>

3) 防除上注意すべき事項

秋期の被害を抑えるため、秋芽萌芽期～開葉初期に防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

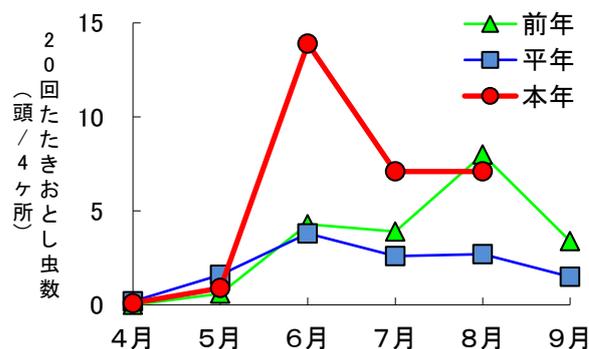


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

7. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数：16.3 枚/m² (平年 7.5 枚、前年 62.3 枚)

平年比：並 (±)

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：やや多 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

特記事項を参照。

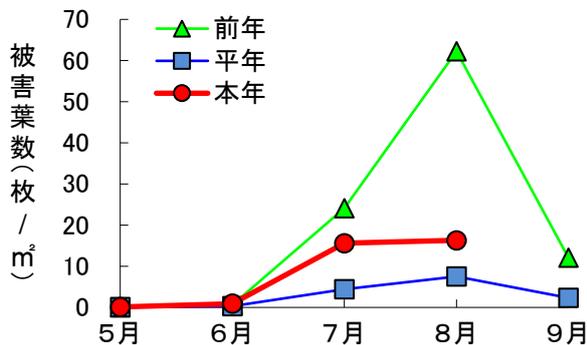


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

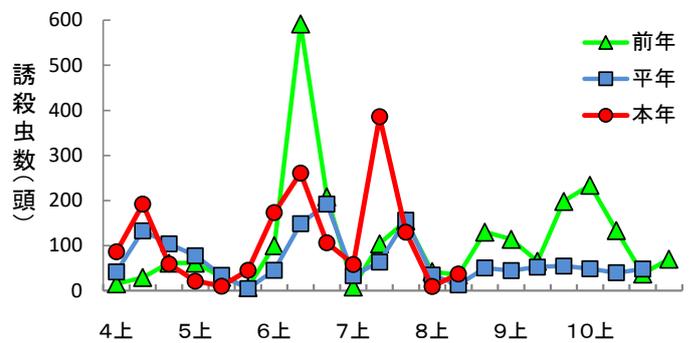


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

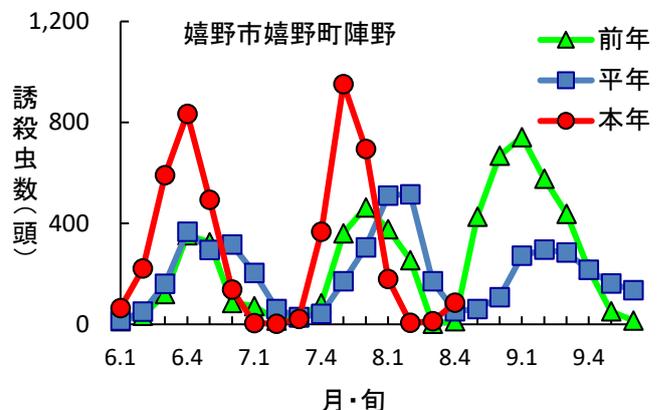
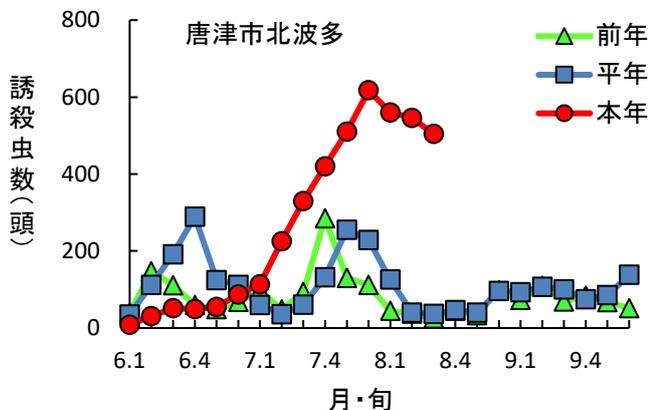


図3 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの半月別誘殺数推移 (唐津市・嬉野市、防除員調査)

※ 唐津市は、設置場所等を変更しているため平年値は令和3年~5年の3年間分のデータで算出

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085

Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji00321899/index.html

